

氏名	牧野 公美子 (マキノ クミコ)
本籍	静岡県
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博甲第 88 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	介護老人福祉施設入所者の終末期対応に関する代理意思決定 －認知症高齢者の家族と看護師の相互作用－

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	新野 直明
	(副査) 桜美林大学教授	渡辺 修一郎
	桜美林大学教授	杉澤 秀博
	筑波大学教授	田宮 菜奈子

## 論文審査報告書

### 論文目次

第 1 章 序章	
1. はじめに	1
2. 日本における研究動向と今後の研究課題	1
第 2 章 本研究の目的と意義	1
第 3 章 研究 1 「認知症高齢者の終末期対応に関する家族による代理意思決定と施設内看取りのプロセス：家族と看護師の相互作用に着目して」	2

第4章 研究2「認知症高齢者の終末期対応を代理意思決定した遺族の満足感と後悔に関連する要因」	4
第5章 総合考察	
1. 介護老人福祉施設で行われた家族による代理意思決定に対する看護支援の有効性と実践面での課題	5
2. 研究の限界と今後の方向性	6

参考文献

## 論文要旨

進行した認知症高齢者の終末期医療・ケアの決定は家族が行わざるを得ないことが多く、多くの認知症高齢者を抱える日本において家族に対する代理意思決定支援は重要な課題となっている。介護老人福祉施設はこのような認知症高齢者の終末期の受け皿としての比重が今後一層増すことが予想されており、代理意思決定支援の改善に活用できる研究が求められている。本研究の目的は、介護老人福祉施設に入所していた認知症高齢者の家族の中で終末期対応に関する代理意思決定の経験をもつ人を対象に、①代理意思決定し施設内看取りするまでの過程、およびその過程における看護師との相互作用を質的研究で解明すること、②代理意思決定に対する「満足感」と「後悔」の関連要因を量的研究で解明することである。「満足感」「後悔」の2指標で評価したのは、両感情が混在している可能性を考えたからである。

質的研究では、家族と看護師の双方の同意が得られたペア16組を対象に分析を行い、次の2点が明らかとなった。①施設内看取りを決断した家族の精神的負担の軽減や代理意思決定の満足度を高める要因は、代理意思決定の時期だけでなく、その前後の時期にも存在すること。②家族が〈後悔はない満足のいく代理意思決定〉という高い評価に至るまでの過程、すなわち代理意思決定の各時期に看護師が直接的・間接的に関わりをもっていたこと。量的研究では、質問紙調査に同意が得られた遺族120名を対象に分析を行い、次の2点が明らかになった。①代理意思決定への「満足感」と「後悔」には強い相関関係は認められず、関連要因が異なる可能性があること。②【看護支援の実施状況に対する認識】が代理意思決定への「満足感」と「後悔」に対して直接的または間接的に影響を及ぼすこと。以上の結果から、看護師が代理意思決定支援の質・量を向上させ適切な支援提供を行うことが、家族の後悔はない満足した代理意

思決定の実現に寄与できる可能性があることが示唆された。

## 論文審査要旨

介護老人福祉施設における認知症高齢者の終末期対応に関する家族の代理意思決定過程の中で、看護師から受けた支援の評価を家族の立場から明らかにすることを目的とした研究論文である。内外の詳細なレビューを実施した上で、研究1では家族と看護師双方を対象に質的調査を、研究2では遺族の満足感と後悔の2点に着目した量的調査を行っている点で、オリジナリティは高い。分析方法は良く検討されており、考察も十分である。内容だけでなく、構成、日本語表現面でも論文としての完成度は高い。

以上から、本論文は博士論文としての水準を満たしているという判断がなされ、合格と判定された。

## 口頭審査要旨

審査委員より、急増する認知症高齢者の終末期家族に対する看護的対応に関する貴重な研究であり、質的・量的研究を適切に組み合わせた研究方法も十分に評価できるというコメントがあった。

次いで、介護職の終末期家族への対応に対する研究状況、質的研究(研究1)のインタビュー調査方法の適切性、量的研究(研究2)における回答・非回答施設間の所在県の差異について質問があったが、レビュー内容の説明、インタビュー方法の詳細と工夫、施設間の差異の原因考察など、適切な回答がなされた。

論文について、インタビュー調査方法の説明、図表の表記、死別後の経過と満足感に関する考察の文章に、補足、修正を求める指摘があったが、研究内容自体とは関係しない軽微な修正であり、簡単に対応できるものであった。

最後に、今後の展望として、看護職のみではなく、他の職種の視点、多職種連携にも調査範囲を広げて、より老年学的意義が高い研究への展開を期待するコメントがあった。

以上から、最終的に審査委員の全員一致で合格の判定がなされた。